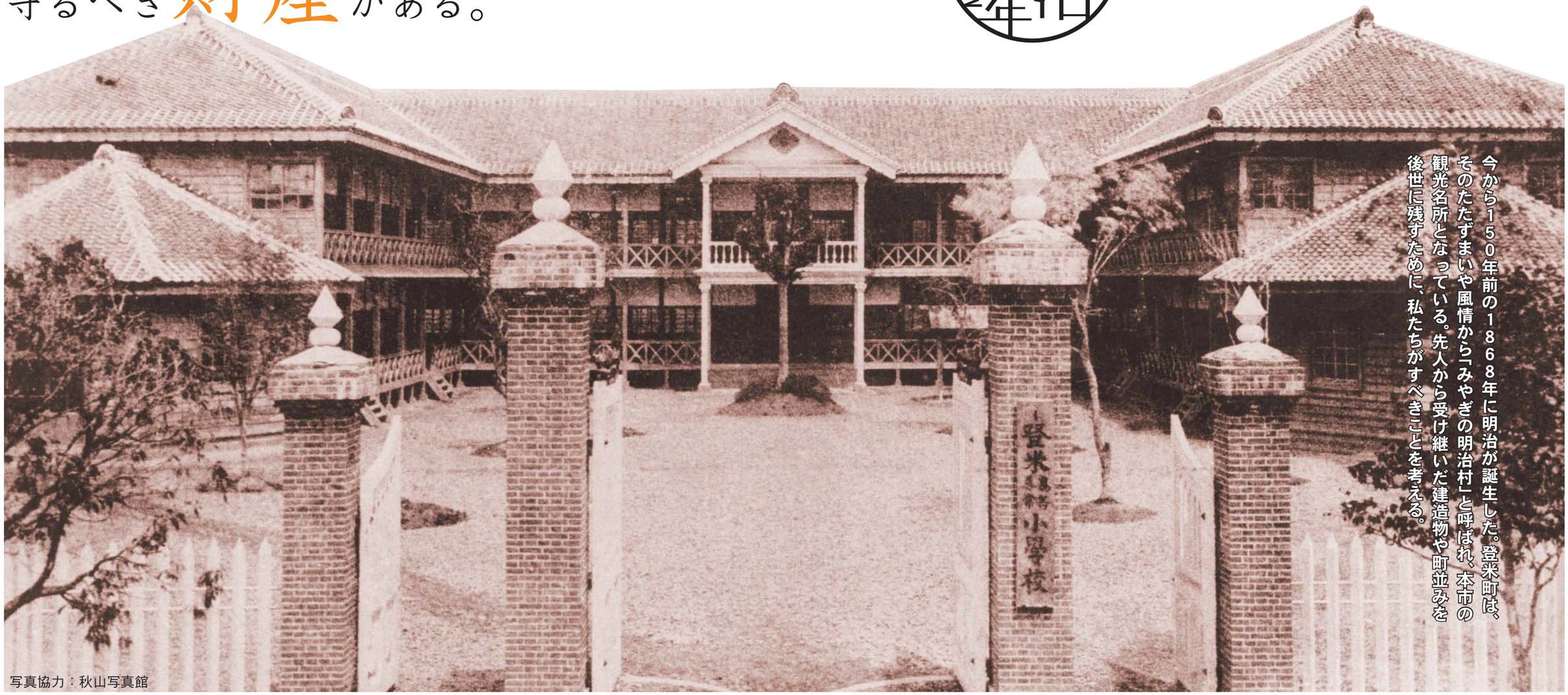
受け継いだ風景、守るべき財産がある。

特集 ― 明治150年 ―

このまちを未来へ継承するために



写真協力：秋山写真館

今から150年前の1868年に明治が誕生した。登米町は、そのたたずまいや風情から「みやぎの明治村」と呼ばれ、本市の観光名所となっている。先人から受け継いだ建造物や町並みを後世に残すために、私たちがすべきことを考える。

激動の幕末から新時代へ

明治が誕生してから、今年で150年を迎えた。1867（慶応3）年12月の「王政復古の大号令」により、天皇中心の新政府が成立した。翌68（慶応4）年1月3日、鳥羽・伏見の戦いをきっかけに、戊辰戦争へと発展。登米伊達氏や佐沼亘理氏をはじめ、当地方の領主たちも出兵し、福島、秋田方面で新政府軍と戦った。同年9月15日、仙台藩降伏を受け帰藩したが、元号は9月8日に慶応から明治に改められていた。新しい時代の幕が開いた。

日本は明治以降、西洋化が進み、近代化していく。大日本帝国憲法の制定、内閣制度や立憲政治・議会政治を導入。鉄道の開業や郵便制度施行など、技術革新や産業化が進む。また、義務教育の導入などにより、教育を充実させ、若者や女性が海外に留学。新たな知識を持ち帰ってきた。外国で学んだ知識を生かしつつ、単なる西洋の真似ではない、日本の良さや伝統と融合した建造物や文化が多数生み出された。多岐にわたる近代化への取り組みが、現在の国の基本的な形を築き上げた。

本市も例にもれず近代化が進んだ。かつては、13代約260年にわたり藩政が敷かれた登米（とよま）。北上川の氾濫による荒地だったため、歴代の当主たちは、川筋を変えるなどの治水を実施。住民のために多くの時間と労力を費やし、人々の生活を支える基礎を築く。時代が明治に移り変わり、それまでは農業が主体だったが、治水が成功したことにより商業が発展。米などを運ぶ舟運（しゅううん）事業などで、さらに繁栄した。川を伝って多くのモノ、情報や技術が伝えられ、旧登米高等尋常小学校をはじめとする「和」と「洋」が融合した建造物が数多く建てられた。

明治から大正、昭和、平成へと時代が変わり、人々の暮らしも変わるが、江戸から明治にかけて建てられた建造物は、今も変わらずに残っている。その町並みは、時代の波に飲まれることなく、人々の生活に寄り添い続けている。

私たちは、歴史的に価値の高い文化財や町並みを先人から受け継いだ。この財産を後世へ継承するために、地域住民、教育機関や市が連携して、さまざまな取り組みを続けてきた。未来に向かい、また新たな一歩を踏み出す。